

雑誌名	能海寛研究会機関誌『石峰』
号	創刊号
ページ	32P
発行年	1995.7.15
E-mail	Sekihou@hazaway.com(能海寛研究会)

**ISSN 1883-4183**



### 能海 寛 略歴

能海寛 法名法流。石峰と号す。明治元年5月18日島根県浜田市金城町長田（当時は東谷村）淨蓮寺に生まれる。12歳で得度し、慶應義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意思を継ぎチベット探検の論文『世界に於ける佛教徒』を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の練磨をなす。郷里にあっては地方史を編纂して和歌を詠み、益田沖の高島にて寺小屋を開設する。哲学者、探検家、宗教家として釈迦直伝の大藏經の經典を求め英訳經典世に出す目的で当時鎖国中であったチベットへ求道のため身を挺し仏教巡礼探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に「般若心経」西藏文直訳（梵・藏・漢・英）など四巻が著書として永遠に伝う。

# 石峰

THE SEKIHOU



能海寛研究会機関紙 創刊号

1995. 7. 15

## 機関紙『石峰』もくじ

機関紙『石峰』の発刊にあたって	日本学士院会員 中村 元	1
能海寛研究会設立にあたって	能海寛研究会会長 横田損昭	2
「能海寛研究会」の機関紙『石峰』の発刊を祝して 東京大学名誉教授 山口瑞鳳	3	
生涯学習と能海寛研究会	早稲田大学教授 山本多喜司	4
『特別寄稿』能海寛とチベット仏教	東京大学名誉教授 山口瑞鳳	5
『会員研究論文』島根と寧夏の交流の原点 チベット学僧 能海寛の寧夏地区シルクロードの記録	会員 岡崎秀紀	12
能海寛研究会会員の募集について		25
能海寛研究会設立発会式報告		26
能海寛顕彰の経過報告		27
第1回能海寛経過記念大会を開催		28
研修旅行の参加者募集について		28
学習会経過報告		29
能海寛研究会会員名簿		30
あとがき		32
能海寛研究会規約		裏表紙

◇表紙写真は「能海寛師顕彰碑」（昭和57年6月6日建立）  
◇題字の「石峰」は島根県立国際短期大学長 島田雅治氏書

### 能海寛師顕彰碑文

能海寛 法名法流 石峰と号す。明治元年5月18日島根県那賀郡金城町長田淨蓮寺に生る。12才で得度し慶應義塾と哲学館に学ぶ。恩師南條文雄師の意志を継ぎチベット探検の論文を発表すると共に語学の研究と山岳登山による体力の鍛磨をなす。郷里にあっては地方史を編さんして和歌を詠み、益田市沖の高島にて寺小屋を開設す。哲学家、探検家、宗教家として釈迦直伝の大藏經の經典を求め当時鎖国中のチベットへ求道のため身を挺し探検を実践した功績は偉大で有言実行と用意周到さは後世に幾多の教訓を残す。その苦難の34年の生涯に般若心経西蔵文直訳一巻などを遺著として永遠に伝う。

## 機関紙『石峰』の発刊にあたって

日本学士院会員 中村 元

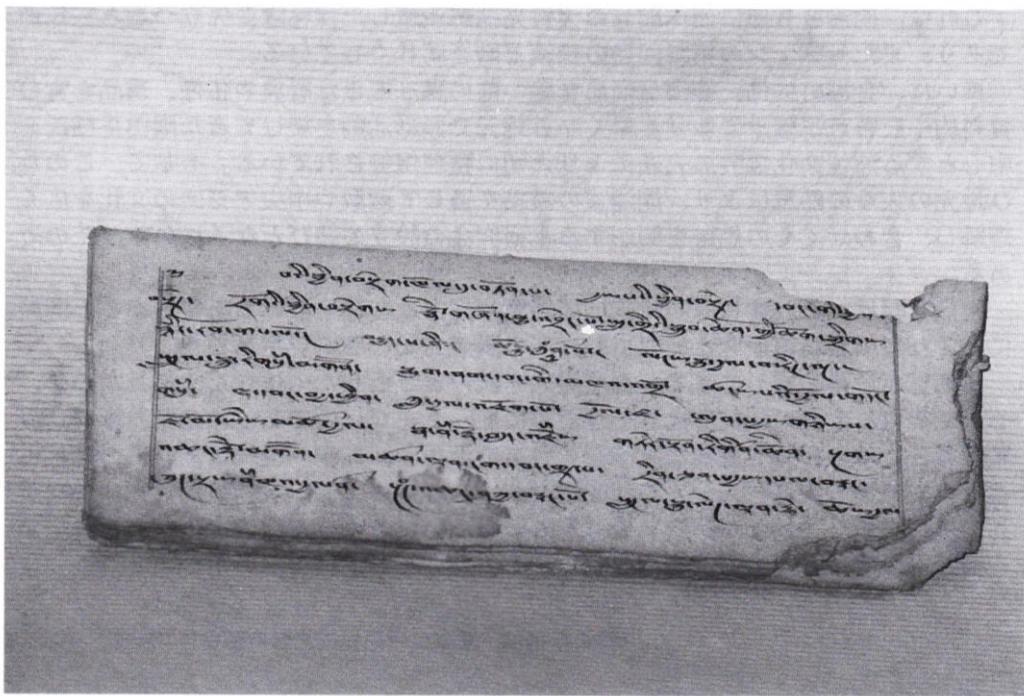
新緑初夏の候となりましたが、御地ではいよいよ「能海寛研究会」が発足し、近く機関紙「石峰」が刊行されるに至りましたことは御同慶の至りです。

われら日本人々は、ややもすれば、島国のうちに留まる傾向があったと言われていますが、眞の佛道を究めたいとして親しくチベットに向かわれた能海師の求道の精神には、ただ感激の極みであります。

小生ごとき末輩はもはや何もできないのが残念ですが、ただ能海師の崇高な精神を仰ぎ、その感佩の一端を今後の人々に伝えたいと願うのみであります。

諸賢の御活動と、大願成就を祈念いたします。

平成7年5月吉日



能海寛の将来したチベット語大藏經（草書）



## 能海寛研究会設立にあたって

能海寛研究会会長 横田 貞昭

西藏（チベット）は、北方に崑崙山脈やアムネマチーン山脈、南はヒマラヤ山脈など世界最高峰の山々が連なり、東は大雪山脈で中国本土と区切り、西方は葱嶺（パミール）高原にかこまれたアジア最奥の高地で、長い間、世界の秘境と呼ばれていた。そしてまた、長い間の鎖国政策と人を容易に寄せ付けない自然環境のなかで、古くから外国人の入国のむずかしい地域のひとつであった。

しかも、西藏はインド仏教の正統を継承するチベット仏教の聖域であり、インドで仏教が滅んだのちも、独自の発展を遂げて今日にまでよんでいるため、仏教の宝庫であり、求道者や仏教研究者や探検家たちの心を深くゆさぶるものがあるところである。スエーデンの著名な探検家スウェン・ヘディンですら、何回も拉萨（ラサ）に潜入しようとしたけれども、ついに果たしえなかつたのである。

この西藏に、今から、ほぼ一世紀前に日本人として初めて西藏の地に、一步をした人物が能海寛である。能海寛は、明治元年(1868)石見国那賀郡長田村（現、金城町長田）の浄蓮寺住職の次男として生まれ、12歳で得度し、慶應義塾と哲学館（東洋大学の前身）に学んだ。このとき恩師の南條文雄博士と出会い宗教哲学者としての影響を受けるだけでなく、師の果たせなかつた西藏探検を決意するに至っている。そして明治32年（1899）から三回にわたり入国を試みたが、明治34年に消息を絶った。

これは、明治35年に西本願寺の大谷光瑞が派遣した探検隊に先立つこと三年前であり、またヘディンの第二回目の探検と時を同じくしている。

幸いに、金城町には、能海が消息を絶つ前に送ってきた経典や仏像、遺品を含む資料約千三百点が残っており、早くから地元で顕彰活動を続けてきた隅田正三氏を中心とする波佐文化協会の人達により大切に整理保管されている。そして、このたび地元の人々の熱意により、能海寛の業績を通じて西藏や中央アジアの文化を広く理解し、合わせてその足跡を顕彰する本研究会の設立の運びとなるにいたつたのである。

生命を賭けてそれを将来した人、能海寛の努力と苦難を顧みる必要があると同時に、これらの資料の研究と保存にむけての調査を始める必要があろう。

能海寛が危険を冒してまで、西藏潜入を試みようとした一体なんであったのか、そして後世、今日の私たちに残そうとしたメッセージは何であったのか、その背景を探ることはきわめて重要な意味をもつものと思う。二十一世紀はアジアの時代と言われている。会員一人一人の研究活動が、やがては金城町全体の活性化につながり、次代を担う子供たちが誇りをもって郷土を語れるような研究会になるよう心から願うものである。会員の皆様の積極的なご協力とご支援を望みたい。

（この草稿は、北京の中央民族大学の宿舎にて記す）



## 「能海寛研究会」の機関紙『石峰』 の発刊を祝して

東京大学名誉教授 山口瑞鳳

この度「能海寛研究会」が発足いたしまして機関紙『石峰』が発刊される運びになりましたことを心からお祝い申し上げます。

能海寛が学問的な素質に恵まれ、研究対象のチベットについての素養もありながら、不幸な運命から大成をまたずに倒れたことは故人の故郷の皆さんにはよく知られている事実であり、わが国の学界に紛れもなく多大な貢献ができたはずであると言われたりしますと、今更ながら惜しくも残念に感じられていることと思います。それだからこそ能海寛の隠れた業績を是非明らかにしたいという熱意が盛り上がり研究会が生まれ、彼が在世したなら親しく語って呉れたであろうと思われるチベットや中央アジアの歴史や現状まで知りたいと願われるでしょう。郷里の人々のこうした暖かい思い入れがなければ、学問の世界も繁忙を極めておりますから、おそらく故人の蒙るはずの栄誉も見出されないまま語り継がれることもなく忘れ去られていくに違いありません。現に同じようにチベットを訪れた人々の事績は、その故郷次第で等しく顕彰されているわけではなく、誰の記憶からも杏として消えかけている場合がむしろ多いようにも思われます。

能海寛の伝記にはまだ不明なことも少なくありません。隅田さんから伺った事情を思い合わせても、その功績が全部は顕れてはいないのでないでしょうか。私個人の印象からいたしましても、何故あの時期に雲南方面からチベットに入ろうとしていたのかと、その辺の事情が充分に含み込めないであります。特に大蔵經を求めて止まなかった人が西寧府を訪れた後、三四年麗江を目指したことにある意味を付きますが、これ以上想像をたくましくすることは許されませんので筆をおかねばなりません。ゆくゆくは皆さんの研究会から様々な事情が判り、清潔な人物だった故人の新しい功績が沢山掘り起こされることを期待申し上げます。



## 生涯学習と能海寛研究会

早稲田大学教授 山本多喜司

いつでも、どこでも、だれでも、なんでも学びたい時に学び、学んだことが正当に評価されるような社会を生涯学習社会と言う。

これまでの学習活動は、学習の機会を提供する側（学校や教育委員会など）が学習者（児童、生徒や市民）に呼びかけて教育するという形で展開されてきた。学校教育はいうまでもなく、社会教育も主としてこのようなパターンで行われてきた。そこでは教師や講師が中心で、一方的に知識や技術を伝達するというニュアンスが強く、学ぶ喜びよりも学ぶ苦しみが先に立ち、時に勉強ぎらいを産み出すようなこともあった。社会教育の面でも公民館の社会教育主事が講演会を計画して、住民に宣伝しても集まる人が少なく、運営に苦しむようなことも少なくない。

これからの中における学習は、与えられる学習ではなく、学習者の主体的意志で、自らの学習を自主的に進めるものでなければならない。行政は学習環境を整備して、地域住民の学習を支援する役割を担っている。平成二年に「生涯学習法」が制定されて法体制は整備されたが、市町村における学習活動は不十分なところが少なくない。

このような状況の中にあって、波佐文化協会は長い歴史をもち、活発な文化活動を続けてきた。隅田正三氏をリーダーとして同志が相集い、なわて塾、寺小屋塾を発展させて先般、能海寛研究会が発足したのである。

わが国の生涯学習が行政主導型であるのに対し、波佐文化協会は正に住民の手づくりによる本物の文化活動である。生涯学習のルーツは江戸時代の寺小屋にある。寺小屋には決まった入学年齢、入学資格、入学日もなく、学年、学級といった仕組みもない。もちろん卒業年次、卒業式、卒業証書もない。隨時入門して師匠から「読み、書き、算盤」の社会生活に密着したさまざまの知識を教えられたのである。波佐文化協会は、その塾名が示すように現代の寺小屋である。

能海寛は金城町淨蓮寺に生まれ、經典研究に没頭し、西藏探検でかけて横死した郷土の先哲である。彼は語学に長じ般若心経をサンスクリット語、チベット語、漢語、日本語、英語の五か国語で訳出対照させている。

彼の仏典翻訳についての構想は遠大で、当時国際紛争が起きそうな情勢にあったチベットから西藏仏典を救出して、世界に広めようとするものであった。それが金城の山里に生まれた三十二歳の青年僧の雄大な志であった。

同じ金城の町に生を受けた今の人々が、先哲の修行と思想の跡を辿って顕彰することはひとり研究会のためばかりでなく、西藏仏教史研究の上からも意義あることである。それと同時に、金城の人々の精神史にも大きな影響を与えるものと思われる。

物質的、経済的な「外的価値」を重視するライフスタイルから精神の「内面的価値」を重視するライフスタイルへ転換する必要がある現代、波佐の人々は既に地域の先哲の研究を基盤として、豊かな精神的、文化的風土を築き上げているのである。

これは単なる郷土史研究ではなく、社会的価値を転換して新しい文化を創造する社会変革の運動もある。波佐にあがったのろしが全国に広がることを期待する次第である。

## 特 別 寄 稿

### 能海寛とチベット仏教

東京大学名誉教授 山 口 瑞 凤

御当地は、日本のチベット研究の大先達でありました能海寛の故郷ということで、私もチベットの研究に多年たずさわって参りましただけに少なからぬ興奮を覚えてやって参りました。

チベット研究には20世紀に入る前後に何人かの日本人が関わりを持ちました。御承知の方も多いかと思いますが、河口慧海、寺本婉雅、能海寛、成田安輝、多田等觀、青木文教、矢島保次郎の名が挙げられます。

これらの人々のうちで非運の最後を遂げられたからではなく、チベットの研究に立ち向かおうとした姿勢が最も高潔であって、予備知識が最も確実であったところから能海寛程惜まれる人はなかったと私は考えております。これらの人々の書いたものや研究者の調べた報告を参考にして見ると益々その感が深くなるだけあります。

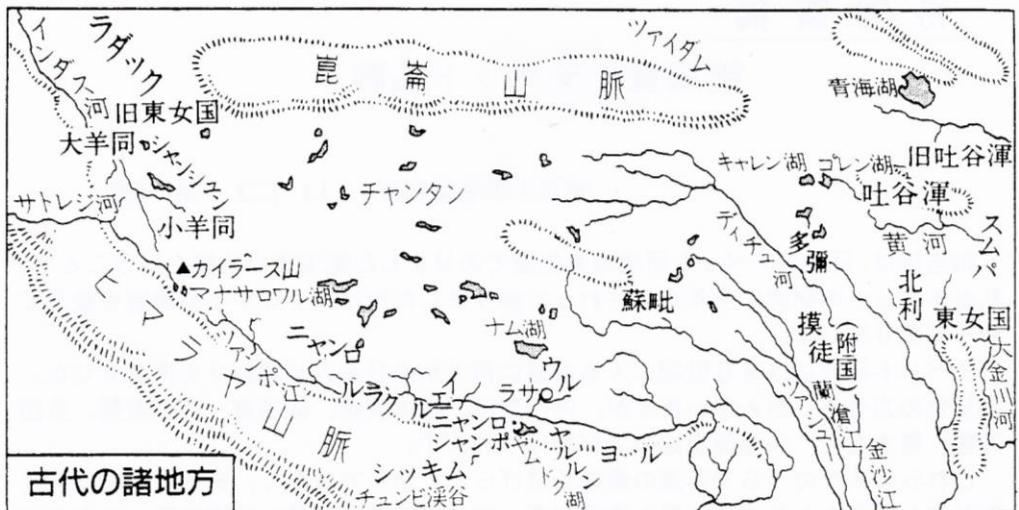
能海寛が何故チベットに興味をもったかと言うと、恐らく、その先生であった南条文雄という浄土真宗大谷派の梵語学者の影響もあったに違いないと思います。この南条文雄という学者は日本人の中では世界の学界で名を挙げた最初の大学者でありましたが、この人がヨーロッパの仏教学界に19世紀前半から急にチベットの名前が浮上してきた事情と言うものに通じていたに違いないと思われるからであります。

尤も大谷派では中国大陆の布教に早くから関心を寄せておりましたので、明治10年にこの派の小栗栖香頂という坊さんが『喇嘛教沿革』という書物を著わして、チベットの事情を一挙に明るみに出しております。従って、この方面的関心があったのかも知れません。『喇嘛教沿革』に序文を書いた石川舜台が他ならぬ能海寛を推薦して大谷派の費用でチベットに派遣しているという事実もよく知られているからであります。

能海寛と最初のチベット入りを果たした寺本婉雅は自分が大谷派の費用で出かけたのてないことに少なからず気を揉んでいた様子がありまして、後年、自分は胆力を認められて軍部から援助を受けることが出来たのだと言って胸を張って見せたことがあります。いずれにしましても能海寛は大谷派のエリートであった訳でありますし、彼が難にさえ遭わなかつたら、彼と同窓の高楠順次郎という梵語学者が東大教授として日本のインド研究に素晴らしい貢献をしたように、きっと日本のチベット学も50年は早く発展させることができたのではないかと思っております。

能海寛が生きていてチベット研究に大發展をもたらしていたら、今日私などがここにやってきて皆様のお耳をけがすような羽目にならなかつかも知れません。

能海寛の事につきましては皆様のうちにもっと詳しい事情通がいらっしゃることでしょうからこの話はこれで閉じまして、能海寛が絶賛してやまなかつたチベット文字と、それで書かれた梵語の仏教經典の翻訳、これを「チベット大藏經」とか「西藏大藏經」と言いますが、これが原型をつくり上げるまでのチベット仏教と言うものの生い立ちをかいづまんでお話いたしたいと思います。一般的なお話になりますので立ち入ったことを御承知になりたい方は、あとで御発言下されば御返事い



たしたいと思います。

まず、チベットの国が何処にあるかということから申し上げねばなりません。御承知のインド亜大陸の北のへりに有名なヒマラヤ山脈があります。その北側の高原の西寄りにカイラース山という山があって、そこから流れ出る河が西から東にむけ山脈と平行して流れています。それがやがて大きく弧を画いて南下してインドのアツサム地方を経てベンガル湾にそそぐのであります。この弧を画くところまでの沿岸に中央チベットの大部分の人間が住んでおります。ヒマラヤ山脈の南側には西からネパール、シツキム、ブータン、アツサムと並んでおります。

河の名をチベットではツァンポ江と呼んでおります。河の源のあるカイラース山は聖地としてテレビにも何度か放映されております。その西側にはガリ地方と更にその北西にラダック地方があります。先程申し上げました大河が大きく湾曲したその東の方、東北の方にはカム地方と青海地方とがあります。カム地方では大きな河が西北から流れ出してこの地方で南へ流れ出てメコン河とかサルウェン河となってラオスとかタイの方面に出ております。ここは南からの季節風の影響を受けてチベットでは気候の最もよい一等地になつております。その東側を揚子江の上流になる金沙江が流れています、沿岸に能海寛や寺本婉雅が明治32年に辿りついたパタンと言う土地があります。この地は当地ダライ・ラマの直轄地でありましたので、中央チベットではありませんでしたが、二人はチベットに入った最初の日本人になるわけであります。これらの東北には青海湖、これをココノールと呼びますが巨大な湖があります。その南東にはこれもNHKのテレビで報道された塔爾寺、チベット名でクンブムと言う寺があります。明治33年能海寛は単身この地に足を踏み入れております。この辺りは有名なシルクロードの東口の一つであります中継地として栄えてきたところです。附近に寺も多く、名僧も輩出しております。寺本婉雅などは後に2回も滞在しております。

次はこの国が何時頃出来たかということになるかと思います。国としての組織が出来たのは7世紀の前半であります、その頃文字が出来ております。能海寛が大好きであります草書の成立はやや遅れます、日本の平仮名の実用化より2世紀もふるいわけあります。

この国の支配階級の祖先は先程申しましたカイラース山の周辺にいた民族で狩猟

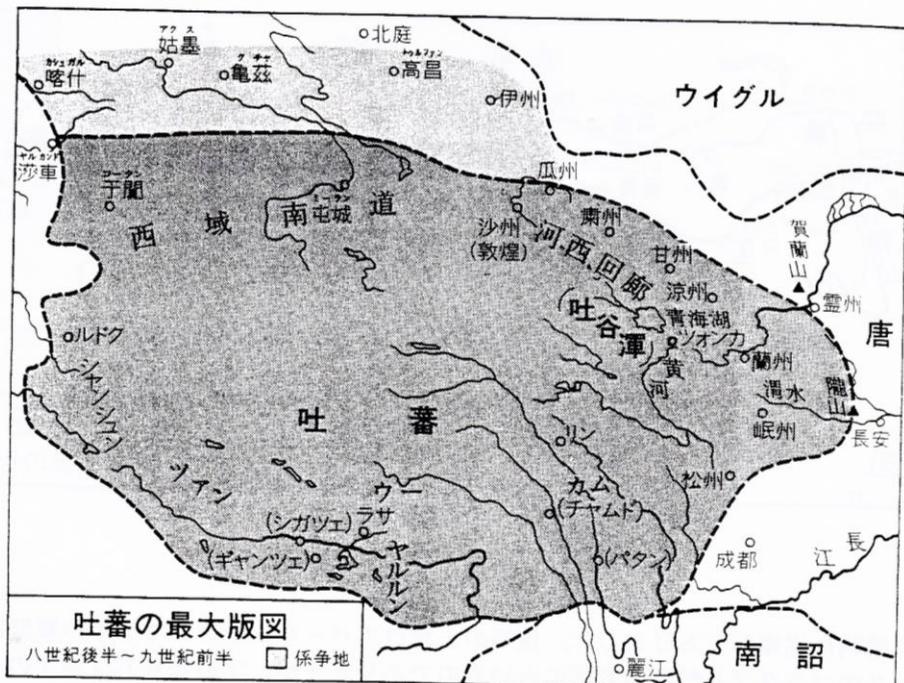


と農耕に従事しておりました。彼等の土地はネパールに近いので文字の原型はネパールのゴラクプル付近の梵字に近いものであります、字の作り方は漢字のように偏とか旁などから出来ております。おそらく中国系の文化と接触した後に考案されたのであります。

この文字を用いて法律をしたためたことが敦煌出土の『編年記』655年の記事に出て参ります。法律を運用する土台になったのが「官位十二階制」と申しましてわが国の「冠位十二階制」とそっくりな階級制度であります。わが国の制度は609年には唐に報告されておりますが、チベットの「官位十二階」は621年以後に成立しております。しかし、630年代にまで下らない様子であります。トルコ石、金、オパール、銀、黄銅、赤銅の位を大小に分けて十二階としたもので、朝鮮半島の類似の制度よりこの方が日本の制度に遙かに似ております。この後、唐の国と接触して王妃を唐の王室から迎えたいと申し出ましたが、635年に唐とチベットの境にあった吐谷渾と言う国に内乱が起こって、国の勢力が親中国と親チベットの二派に割れました為、親中国派が妨害しましてチベットと唐の関係が悪化して王妃はやれないと言うことになったのであります。

この時はじめてチベット軍が唐と親中国系吐谷渾を相手にして638年に戦争をいたします。その結果640年にはチベットの若い王が唐から文成公主と言う王女を嫁に迎え、両国は平和な関係になったのでありました。結果から言いますとチベットが戦争に勝ったのであります。

しかし、この王女は本当の唐の王室の出身者であったかどうかわかつておりません。この王女に対する唐の国内の反応ぶりから見ますと偽せ王女であったのかとさえ思われます。その一つを申しますと、この王女は622年に王子を生んでいるのですが、唐の宮廷では問題にもしていないからであります。623年には夫の王が死んだので父王が再登位しました。若い王妃はパタンの西南に住んでいたのですが、中央チベットに子と共に戻って参りまして、夫の3年の喪が明けた時、唐から仏像を取り寄せてチベットで初めての寺、今日の小招寺（ラモチエ）を建ててそれを祀り、その上で、この土地の習慣に従って夫の父の再登位した王と再婚いたしました。



時に王は65才でありましたが、3年後になくなっています。この王にはネパールから迎えた若い王妃がいて二人でこの王の菩提の為に寺を建てております。この寺がチベットで最も大切にされるお寺でありまして、漢字では「大招寺」と書きます「招」は「お釈迦様」の意味のチョウォを写したもので、その「お釈迦様」は唐から636年にチベットに届けられた仏様であるとされ、今日チベット第一の国宝になっております。

このようにして二つの菩提寺が7世紀半ばに出来ておりますが、その時の王が大層熱心な信者であったと言うわけではないようでした。

チベットはこの王の没後に軍事国家体制を整えまして、親チベット吐谷渾を併合しまし他。昔吐谷渾と言う国が青海を中心にしてシルクロード東口支配で得た富で栄えたのを真似て、吐谷渾に完全にとって代ろうとして唐の国と759年頃から10年程、吐谷渾全域の支配をめぐって争って結局勝ちますが、その為に唐とシルクロード全域をめぐる戦争をそれ以来822年の和平条約の成立するまで続けたのであります。

勝敗は定まりませんでしたが、和平の為に810年に金城公主と言う王女、これは本当の王女でしたが、当時7才の王の妃に迎えられました。この王女が成長するとお寺を建てるのであります。尤もそれまでにも1~2のお寺が建てられて王室の信仰をついでていたようでしたが、この王女の晩年には元来チベットにあったポン教と言う日本の神道のような宗教をかなり苛々させた程目障りになつたらしく、王が没しますと、ポン教を信仰する有力な大臣が破仏を強行したと言われております。

金城公主を娶った王には子供はいませんでしたが、この王は晩年に唐の国に若者を5人送って仏教を学ばせたと言われております。別の妃が生んだ王子のお相手役をつとめておったのがこの5人であったのだそうです。彼等は唐の国で厚くもてなされて帰国する途中、四川の成都と言う能海寛も通ったところであります。

その地で金和尚無相と呼ばれた念佛禪の名僧にあって色々教えを受けたと伝えられています。この坊さんはお隣りの韓国新羅の王子であったとのことであります。偉くなると誰でも王子なんかに祭り上げられますから、本当かどうかはわかりません。この5人が帰って来た時、國中は、先程申しましたチベットの神道ポン教徒によって仏教の排斥運動が起こっておりました。

王子は即位いたしましたが、数年間は辛棒をしてポン教徒による破壊活動を白い眼で見ていたのでありました。そして20才になって権力をしっかりと掌握した時に、先に唐に行ってきた5人やその他ネパールに仏教を学びに出かけようという人達をブレインにして破壊活動を擅にしていた權臣に示しをつけるためにも、「以後、仏教を國教にする」旨を宣言いたしました。この2年後の763年10月チベット軍は唐の都長安を2週間にわたって占領して、金城公主の弟を皇帝にして元号を改め、罪人を恩赦したりしましたが、傾勢の不利を見ると沢山の技術者などを無理やりに引き連れてさっさと國に帰ったのでありました。この時多くのチベット人が長安の都と言うものを見たのでありました。そこには立派な寺院が建ち並んでいた筈であります。

軍事大国として当時シルクロードの南道一円を占領して、中国からそこに向う時に通る河西回廊地帯も占領して、長安の西200キロの隴山を国境としておりましたチベットも國の中は見窄らしい岩山に差しかけをした小さな町があるだけでありましたから仰天して帰ったのですが、国内資産を精神物質両面で豊かにしなくてはならないと考えたことだろうと思います。今日の経済大国を自称して悦に入っている日本も国内資産は貧しいものです。前の大戦でヨーロッパとかアメリカを占領していたのでしたら、戦後復興する時お金だけを貯めこまないきっと国内資産を豊かにして、小さな地方都市でもおわいの匂いのしないヨーロッパ並みに今頃はなっていたことかと思われますが、そうはならずに金ばっかり貯めこんで世界中で守銭奴のように言われているものが思い合せられます。

チベットの指導階級が漸くその気になっているのを知って若い王は4年後、ぬけぬけと唐に使節団を送って仏教導入の手伝いを要請いたしました。同時にネパールに来ておりましたインド仏教の最高の指導者のシャーンタラクシタを迎えて王は仏教の肝要を聞きましたが、流石に矢継ぎ早の運動で抵抗が強くなっていたらしく一旦ネパールに帰って貰い、770年代に入る前に再びこの大学者を迎えた様子がありました。

このシャーンタラクシタと言う坊さんは、インドのナーランダーと言う大僧院の管長をつとめていて、大乗仏教の開祖とも考えられる竜樹以後の最高の学僧であったと研究者の間で取り沙汰されております。この大僧院は有名な三藏法師の玄奘が勉強したインド大乗仏教のセンターであります。これ程の坊さんは中国あたりにやって来たことはありませんでした。やはり地の利があったからでもあります。それにしてもインド・ネパールのすぐ北にありながら7~8世紀まで仏教が伝わらなかったのでありますから、余程環境がよくなかったと考えられてよいでしょう。

再びチベットに入ったシャーンタラクシタはポン教の人々を説得しました。貴族の間にもわが國の蘇我、物部の争いのような事件が起こりまして仏教崇拜派が勢力を得ましたので最初に申し上げました中央チベットを西から東に流れるツァンボ江の北岸でやや東寄りのタクマルと言うところ、訳して言いますと「赤岩」と呼ぶ土地に僧院としてはチベットで最初のサムイェ一大僧院を造り始めました。775年から12年をかけて中央の大本堂の四方角各々三つの大堂を建て本堂の左右に日月二堂を置いた大規模のものがありました。

今日もその跡が残っております。そして、大本堂が出来上がって落慶法要をするのに当たり、チベット人の坊さん6人に具足戒と言う一人前の坊さんとなる戒律を778年に授けてチベットで始めて坊さんの集り、僧伽をつくったのでありました。この式をするためにインドのナーランダー大僧院から12名の戒律をきびしく守って来た人達を招きました。

同じ年のうちに大本堂の落慶法要をチベット人の僧達と一緒に営んで、この時王は仏教を国教にする勅令を発布して王妃や高官達に署名させ、証書の他に石碑にその趣旨を刻らせたものが今も残っております。

このようにして仏教が始まりますと、シャーンタラクシタは先に呼んでいた坊さん達に指導させてチベット人の才能のある若い人達を集め梵語を学ばせ、梵語の仏典の翻訳に当たらせたのでありました。シャーンタラクシタがサムイェーを建てる時、密教行者として有名なパドマサンバヴァーと言う人もチベットに入りましたが、余り長くは滞在しなかった模様がありました。しかし、密教は当時インドに流行しておりましたので、その後もチベットに伝わっていたようでした。

シャーンタラクシタという大学者はサムイェー大僧院の完成する787年以前に没くなつたようでした。それ以前の781年頃から唐の國からも坊さんが招かれて當時2人が駐在してチベット人に仏教を指導することになっておりました。786年に皆さんもテレビなどで御承知のシルクロード東の玄関敦煌がチベット軍に占領されると、その地から摩訶衍と称する中国人の禪宗の坊さんがチベット本土に招かれまして、エネルギッシュに説教したらしく、沢山の信徒をまわりに集めまして、時の皇后もその弟子になり、彼女が王子を失っていたこともあってすっかりその気になって剃髪して尼さんになった程であります。これが791年の事件であります。この頃からインド系の仏教を学んでいた人々が騒ぎ出しまして摩訶衍の禪宗はインド仏教の教えに逆いていると言い前後3回にわたって質問書を寄せ、王様に双方から自分達の主張が正しいと申請し合つたのであります。

摩訶衍和尚は人は何をしても業がつきまとつて悟りの妨げになるのであるから、ただ、何もしないで無念無想の座禅をしておれば、やがて悟りが開けると主張しておりました。一方シャーンタラクシタ以来インドの坊さんは、人間は生物はじまって以来の身についた習慣でエゴイズムでしか動けなくなっている。そのエゴイズムを支えているのは自分と自分の執着する「もの」が何時も変わらずそこにあると思い慣れていることから自分のもつてゐる「もの」を守り抜くのに命懸けになるという生活習慣である。今様に言いますと人は細胞の遺伝子がもつ情報に支配された生物的行動しか取れません。ところが「もの」は無常であつて一瞬も停滞することがありません。それを否応なしに思い知らせられた時に、例えば、近親者の死に遭った時など苦しみにつき落とされます。これを避けるには、仏の教をお経から聞いて、よく噛みしめて意味を知り、その意味に思い慣れることが必要である。他方その執着のない思いを頭の中でもつばかりでなく身体の行動で身につけねばならない。その為には人に善行と言われる善行を虚心で行えるようになって、人にもそのようにするように仕向けるのである。こうした結果、苦しみを和らげる心がもてるようになると、まあこのようにインド仏教は教えていたわけであります。

王様はどのように考へてもインド仏教の方が社会的に意義があると思って禪宗を禁教にしたのでありました。しかし、はびこっていた禪宗信者が荒れ出して焼身自殺で抗議するものも出たので、やむなく禁令を解いて、ナーランダー大僧院に使を出して、亡くなったシャーンタラクシタの弟子カマラシーラを急いで招きました。幸いなことにシャーンタラクシタを凌ぐ力があるかも知れないといわれていたカマラ

シーラが794年にやって参りまして、サムイェー大僧院の発菩提心院と言うところで王の前で御前論争を行いました。結果は見えておりましてこの大学者の前では摩訶衍和尚のこんにゃく問答は通用いたしません、禅宗は以来この国では禁止となっていました。

カマラシーラの禅宗批判は大きく分けると2点ありました。自分の救いのために一切の善行をしなさいと言うことは大乗仏教ではありえないことである。大乗仏教の基本は救われる自分への執着を絶って人にもそのことを説き、すべての我執をなくすることであるから、摩訶衍のいうような禅宗は大乗仏教ではない。

第二に無念無想は、仏教の教えを心にしみこませる為の手段として三昧の境地をつくるのであって、仏教の教えを聞かず、吟味もしないまま、ぼんやり坐って事が済むなら卒倒したあとに悟れるであろう。般若の智慧をえる為に坐禅の三昧に入つて仏教の教えに即した思いに慣れ、我執のない潜在意識を作るという大事な方法を捨てるのでは仏教でさえもない。

と言われたのでありました。

摩訶衍がチベットを去つて間もない頃、カラシーラも亡くなつておりますが、仏教の修行の仕方を書いた書物を四部も書き残しております。チベットに来る前に書かれた大部の『中觀光明論』と言う書物は師匠の書いた『中觀莊嚴論』と言う書物と共に仏教学では重要な書物とされております。

仏教を導入した王、ティソン・デツエンと申しますが、この王が797年に没して、この後9世紀はじめ迄、チベットの国情は国境の戦争などで落ちつきませんでしたが、この王の第三子が位を継ぎますと、中国との国交も回復して再び仏教が盛んになり、カルチュンというところ、今日のラッサの南になりますが、大僧院を建て、再び家来達を集めて崇仏の誓約をする詔書を王が発布して、王妃や重臣が署名をしております。この頃から国政の頂点には二人の坊さんが立つて指導をしていましたため、唐もそれまでの軍事一点張りのチベットと変わったことを知って態度も随分と和らげたようありました。

敦煌などの占領地にはチベット語の出来る中国系の人々もいたので、中国語の仏典の翻訳などがこの地で行われました。814年には經典を翻訳する時のチベット語の言葉遣いを統一した辞書や解説の書などが出来て、それ迄の翻訳もこの統一した訳語ですべて改訂されました。この時の王は亡くなりましたが、その王子が後を継ぎまして、終始指導に当たっていた僧たちのはからいで唐の國とチベットの間に822年に和平条約が出来上りました。この時の国境は先に申し上げたのと殆ど変わりませんで、長安の西200キロの隴山以西がチベットとされております。この条文を刻んだ石柱が今でもラッサの大招寺の境内にありますが、見えないように塀がつくられています。

平和条約が出来たあとでデンカルと言う宮殿に保管されていたそれ迄に翻訳された大藏經の目録が824年に出されました。それを見ますと今日重視されている經や論や注釈書が殆ど揃っているのを見ることが出来ます。この後843年にこの国が分裂する迄訳經の事業が続いて大藏經が補わされていきました。この事業をよく認識して、その偉業を感嘆し、何としてでもこのような素地をもった仏教に直接触れて学びたいとしていたのが他ならぬ御当地の能海寛その人であったことを強調したいと思います。

ざっと走ったお話でしたが、仏教を学んだチベットは822年以後、外國を戦争で攻撃することの全くない専守防衛の国になって中国を安心させたのであります。

《1987.8.22 リーダー養成講座『波佐寺小屋セミナー』での講演》

## 会員研究論文

### 島根と寧夏の交流の原点 チベット学僧 能海寛の寧夏地区シルクロードの記録

能海寛研究会会員 岡崎秀紀  
(1995島根県高校生寧夏国際交流登山・調査隊)

#### はじめに

島根と中国寧夏回族自治区との交流が拡大してきている。環日本海や北東アジア交流が叫ばれ、県内の各地域で北東アジア各国との国際交流が進んでいる。特に島根県は寧夏と友好交流協定を結び、学術文化、経済、民間（スポーツ、芸術活動）の分野で交流を積み重ねてきた。島根と寧夏との関わりは、「90年日中國際交流会議～シルクロードと山陰～」（主催 環日本海松江国際交流会議：島根県・松江市・島根大学・山陰放送）での学術交流が始まりと聞いている。

金城町出身のチベット学僧能海寛は、明治31年（1898年）仏教の原典入手を目的に中国に渡り、チベット入りを目指した。中国内をかなり広範囲に歩いていた。2度目の挑戦では、青海省からのチベット入りをもくろみ、西安からシルクロードを西進した。西安からのシルクロードは、蘭州方面へ寧夏地区をかすめるように通じている。能海寛関連の研究書では、能海寛の通過したシルクロードの詳細ルートや寧夏のことには触れられていなかった。

シルクロードのルートを詳細に調べてみると、西安から蘭州までは、南路と北路の2つの道があった。南路は、渭水沿いに西進して、寧夏を通過しないが、北路は今の寧夏南部の固原県内を通過する。能海寛はシルクロード北路、南路のいずれを通過したのであろうか。

能海寛の行動を記した「能海寛遺稿」を、寧夏との接点で調べてみた。記録を見て驚いた。西安から蘭州までの通過地点に、寧夏南部の六盤山があるではないか。能海は寧夏内を歩いていたのであった。六盤山は、唐の時代のシルクロード南路、北路ではなく、元の時代以降のシルクロードの要所であったのである。

島根と寧夏の接点の始まりは、明治33年（1900年）7月14日、寧夏南部の六盤山を通った能海寛であった。能海は、もちろん寧夏との交流を求めて寧夏を歩いていたわけではない。仏典探求を目的に、青海省からのチベット入りの探求過程で、西安・蘭州・青海を旅する途中であった。最終的に能海は、チベット入り、仏典入手という所期の目的を達成することが出来なく、明治34年（1901年）雲南省大理府を経て消息を断ってしまい、島根の地に帰って来ることはなかった。今から95年前、能海寛のチベット入りを目指してのシルクロード行は、島根と寧夏との交流の原点であった。

したがって本稿は、当時のシルクロードに言及しつつ、能海寛と寧夏との接点の記録を紹介することである。能海は、日本人として初めてチベットへの仏典探求の旅を実行した学僧であるが、同時に島根・寧夏の交流史の最初に登場する人物である。また、六盤山・賀蘭山など寧夏の地図を現地踏査の上で書き、島根に送った。それは、島根へもたらされた寧夏情報の第1号であった。

平成7年（1995年）夏、私たちは寧夏北部の賀蘭山への登山遠征を進めている。県

内高校山岳部の部員と教員が、寧夏の高校生と合同で登山し、各分野の調査を行うというものである。能海寛の「島根と寧夏の原点」の記録は、この計画を一層意義あらしめるものとなろう。

## 1. 仏典探求の旅 ~能海寛が歩いた中国大陸~

### 1-1 探検家・登山家としての能海寛

能海寛の仏教徒、チベット学僧としての業績は研究書に譲り、ここでは探検家・登山家の側面に連なる事実を、これまでの文献(1)よりまとめてみる。

明治 元年(1868年) 5月 島根県那賀郡金城町長田、真宗大谷派天頂山淨蓮寺にて生まれる。

23年(1890年) 7月 東北地方紀行

24年(1891年) 7月 富士山単身登山

25年(1892年) 8月 東京南島(伊豆七島めぐり)紀行

31年(1898年)11月 チベット行を目指し、中国上海へ渡る(11月16日着)

中国国内の記録

第一次探検:明治31年(1898年)11月21日~明治32年(1899年)10月1日

上海→漢口→武漢→重慶→成都→我眉山→襄塘→巴塘

第二次探検:明治32年(1899年)10月1日~明治33年(1900年)8月22日

巴塘→成都→漢中→武功→西安→平京→西寧→冬科爾

第三次探検:明治33年(1900年)8月23日~明治34年(1901年)4月21日?

冬科爾→重慶→貴陽→昆明→大理→麗江→中甸→?

能海寛の最大の探検旅行は、明治30年代の中国・チベットへの仏典探求の旅であった。国内ではチベット入藏のための訓練だろうか、富士山単独登山などを行っている。富士山の標高が、チベットのラサとほぼ同じであることを知っていたのである。明治30年代の中国奥地の旅、また富士登山である。これらは、能海の探検家・登山家としての姿でもある。



図A：能海寛が歩いた中国大陆

「チベット探検の先駆者・求道の師『能海寛』 隅田正三著」より

## 1-2 西安から蘭州へ シルクロードの旅

能海寛が歩いた中国大陸内のコースを紹介する。それはチベット入りを目指す能海寛の軌跡でもある。最初の挑戦は、上陸後直ちに上海からほぼ西進する道程となった。四川省の巴塘で断念の後、青海からの入藏に切り換えた。西安からはシルクロードに沿って蘭州、青海へ進んだ。青海では運悪く盗賊にあい、引き返さざるをえない羽目になってしまった。重慶で入藏の準備を再度整えた後、能海は雲南省からのチベット入りを模索し、昆明、大理へと赴いている。

能海寛の歩いた中国国内は、省名で江蘇省、安徽省、湖北省、四川省、陝西省、甘粛省、寧夏回族自治区、青海省、貴州、雲南省に及んでいる。これは中国大陸の24省（自治区）中の10省（自治区）に相当している。

## 2. 寧夏地区内の記録

### 2-1 寧夏地区の概要

寧夏の概要是文献を参考にするとして、ここでは能海寛との接点の意味で、寧夏と仏教の関心から述べるに留める。

#### 1) 寧夏の仏教遺跡～仏教の聖地 須弥山～

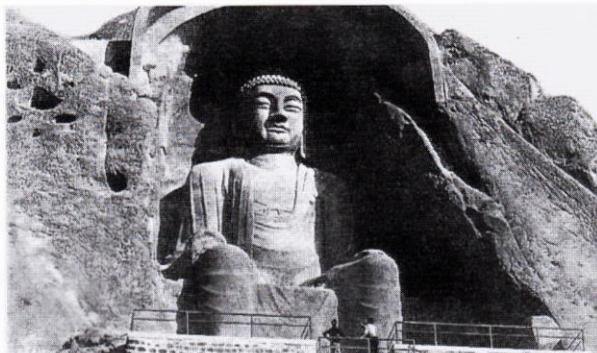
##### 須弥山

中国中央民族学院の胡振華教授は、1990年11月、松江で開催された「'90環日本海シリーズ・日中國際交流会議 シルクロードと山陰」で、寧夏の仏教的な位置について次のように述べている。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

寧夏南部地区は古代シルクロード東側の北路に位置し、長安の西北にあたります。寧夏の固原県から西北55キロのところに「須弥山」という山があります。「須弥」とは、梵語のSumeruの音訳で、「中心」、「聖地」の意味です。ここには百余の石窟があり、その中の釈迦座像は高さ19mに達します。石窟の大部分は北魏、隋、唐の時代に作られたものです。……(中略)……寧夏南部の須弥山石窟は「寧夏の敦煌」と言うことができます。

寧夏は今では回族自治区です。しかし、北魏、隋、唐の時期には仏教が盛んな地域でした。当時須弥山石窟一帯はシルクロードの東側北路の通過地であり、さらに甘粛北部、寧夏南部地区の仏教の聖地でした。須弥山石窟一帯は東西文化交流の面で重要な働きをしました。



図B：須弥山大仏  
内藤正中編：「島根県の環日本海交流」より

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

仏教の宇宙観では、須弥山を中心とした一個の宇宙が千個集まつたものわ小千世界、それが千個で中千世界、中千世界が千個集まつたものを大千世界といい、それらをまとめて三千大千世界と呼んでいる。

寧夏の仏教遺跡では、須弥山が代表的なものであるが、それ以外に、能海寛の行程に関わりのありそうな寧夏内の仏教上及び交通上のポイントをあげておく。

### 六盤山(2,928m)

寧夏の仏教遺跡・聖地である須弥山の近くに、シルクロードの要所、六盤山がある。甘肅の静寧、平涼と寧夏を結んでいる。

六盤山の山道は、6回ぐるぐるまわって(盤)初めて頂上に至る。それで六盤山と呼ばれた。六盤山山域は、北はシルクロード北路の靖遠から、南はシルクロード南路の渭水の峡谷まで、長さ240Km、幅30~60Kmにもわたっている。



図C：六盤山（文献(5)より）

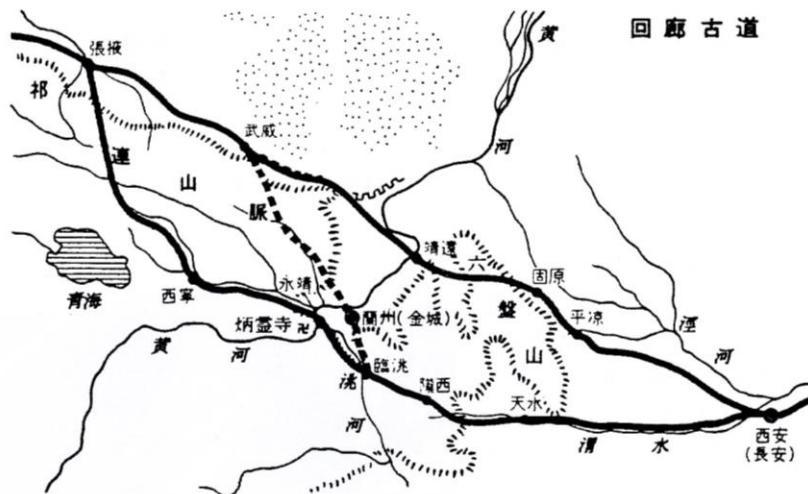
### 賀蘭山(3,556m)

寧夏はチンギス・ハーンの西征により、その後回族文化の中心地となつたが、西夏時代は独自の文化、とりわけ仏教文化を育ててきた。寧夏の歴代の王の陵墓が、賀蘭山東麓にある。寧夏の中心地銀川の西北 25Km にあり、黒っぽい岩山が、黄河に沿つて広がる沖積平野より盛り上がつてゐる。賀蘭山脈は南北 200Km、東西の幅15~50Kmで、黄河の作った平野とゴビ砂漠に連なる内蒙ゴリ砂漠の間を分断するように横たわつてゐる。

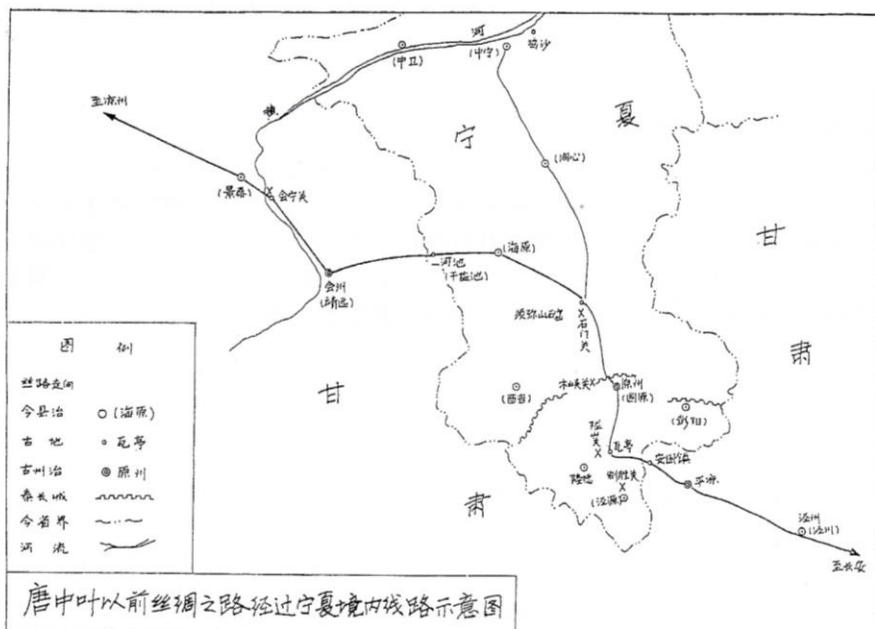
## 2) 寧夏内のシルクロード ~南路と北路~

漢や唐の時代、長安（今の西安）から西域に入るシルクロードには、南北2つのルートがあった。

「磁石や羅針盤のなかった頃、長安を出て河西回廊を通り西域へ行くには、河をさかのぼるのが一番確実な道だったという。その一つは西安から出発し、渭水の支流である涇河に沿つて北上し、平涼—固原—靖遠をたどり、黄河を渡つて武威に至る道であり、他のひとつは渭水に沿い、天水—臨洮—永靖を経て黄河に至り、黄河を渡つた後、再び黄河の支流である大通河に沿つて北上し、祁連山脈を越えて直接、張掖に至る、南北二つのルートである。」（「NHKシルクロード 長安より河西回廊へ」より）



図D：シルクロード北路と南路  
南北シルクロード（甘肅・青海・寧夏）のルート  
(「NHK シルクロード 長安より河西回廊へ」より)



図E：シルクロード北路（寧夏内）  
(「NHK シルクロード 長安より河西回廊へ」より)

シルクロードの北路ルートは、平涼から固原を経て靖遠で黄河を渡り、河西回廊に向かうが、仏教遺跡の須弥山石窟は平涼から固原を経て靖遠の途中にあたっているのである。

寧夏内のシルクロードの道程は決して長くないが、寧夏はシルクロードでの東西文化の交流、交易の影響を強く受けた。シルクロードの入口の位置にあたる要衝であった。

## 2-2 寧夏での能海寛の記録

「能海寛遺稿」より、能海寛が歩いた寧夏地域内の記録を再現する。  
(新字に直した漢字あり。)

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

明治33年11月9日、重慶より発信した手紙は以下の通りである。

### 陝西省西安府より甘肅省蘭州に至る大道

- 七月三日 西安府西門を出で、三橋鎮、咸陽を再び經、店張鎮泊。八十五里。周文王、武王、周公等の陵を見る。
- 四日 醴泉縣を經、乾州泊。七十五里。
- 五日 武則陵山を越え、監軍鎮を經、永壽縣泊。九十里。人家僅二百餘戸、穴居人又多し。
- 六日 張口、關口を經、邠州泊。七十里。
- 七日 藉林數十里を經、大佛寺、亭口鎮、冉店堡を過ぎ、長武縣泊。八十里。此邊非常の寒村あり。
- 八日 窯店を過ぎ、瓦雲鎮を似て陝西、甘肅の省界とす、高鎮を經て、涇州泊。百里。
- 九日 王孫鎮を經て、花所鎮泊。五十里。甘肅の十里は、陝西の十里に比し殆ど十五里の長距離なると、病の為里進まず。
- 十日 白水鎮を經て、四十里舗泊。五十里。
- 十一日 甲積峪を經、平涼府泊。四十里。風邪發熱の為頗る困難、滯在一日、漢醫の謬断を得服薬、北京の變を聞く。
- 十三日 貞河子、安國鎮、後店、三關口を經、瓦亭泊。九十里。
- 十四日 和尚舗、六盤山を越え、隆德縣泊。五十里。
- 十五日 砂糖舗、神林舗を經て、靜寧州泊。九十里。
- 十六日 一山を越え、高家堡、界石堡を經て、青家驛泊。九十里。
- 十七日 太平店、灌家州を經て、會寧縣泊。九十里。
- 十八日 雞兒嘴を經て、西鞏驛泊。五十里。此數日は清水なく、只苦水のみにて甚困れり。
- 十九日 青涼山、(木)家灣等を經て、安定縣泊。七十里。
- 二十日 十八里堡、俛關口を經、秤釣驛泊。六十里。
- 廿一日 車道嶺を越え、甘草店泊。五十里。
- 廿二日 清水鎮、塔新營、下關營を經て、金家崖泊。七十里。
- 廿三日 百子堡、小水子、桑園、(根口根)を經、省城蘭州府着。六十里。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

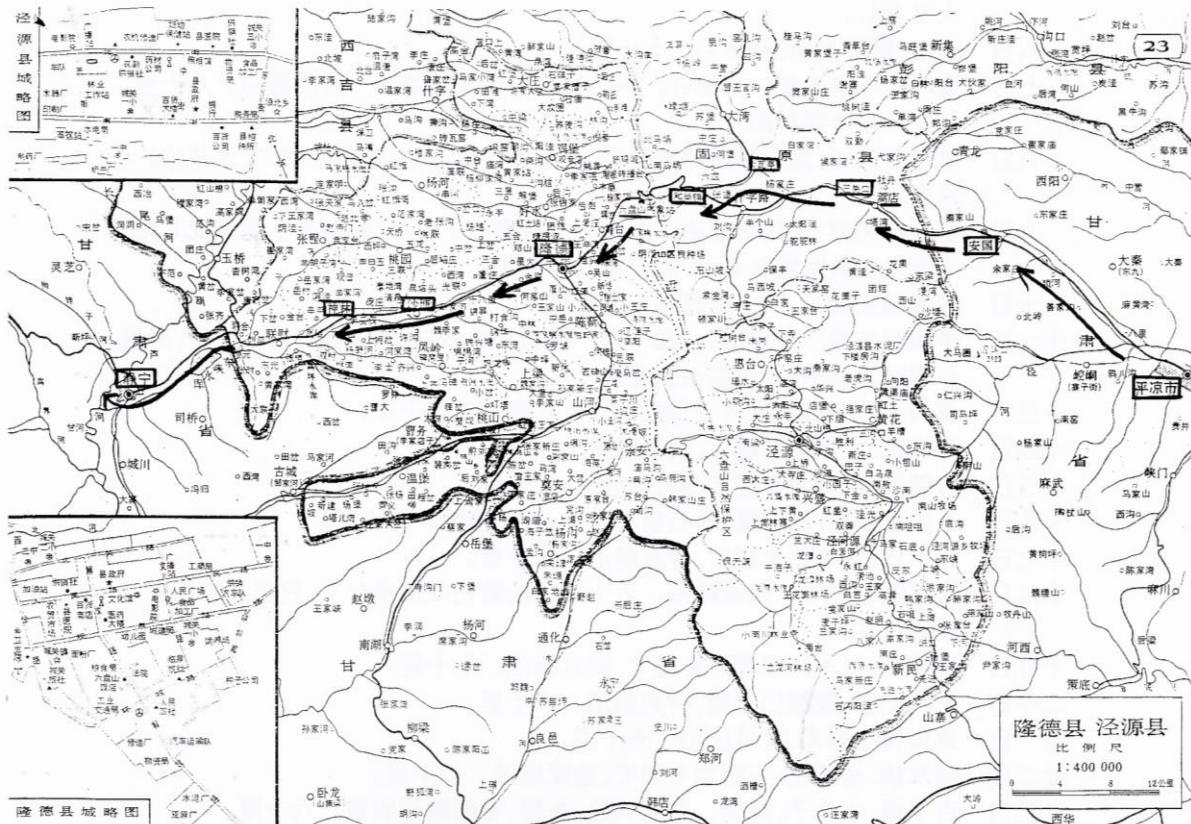
また、青海からの帰途送った手紙(12月3日)には、寧夏地区の県名が記されている。

## 蘭州街道

七月三日、再び西安を發して蘭州に向ふ、咸陽縣、醴泉縣、乾州、永壽縣、汾州、長武縣を経て、瓦雲鎮と稱する地にて甘肅省に入る。更に涇州、平涼府、隆德縣、靜寧州、會寧縣、安定縣を経て蘭州に入る。七月廿三日なり。一千四十清里。但し甘肅の里長は陝西に比して一倍半あり、故に殆ど一千七八清里となるべし。此道中にては風邪にて熱出で、又少しく足を痛めたると、四五日間毎日清水なくして只苦水と稱するニガリ水のみにて之には大に困難せり、道路には両側に柳樹を植ゑ、馬車道なれば道幅は大なり、然れども降雨の日には泥土粘着して非常に難行なり。



西安から甘肅まで、能海寛の通ったルートを地図に記入する。図は、西安・甘肅ルートの概略（点線は、従来考えられていた渭水沿いのルート）と、寧夏内の固原県・隆德県内のルートを示す。

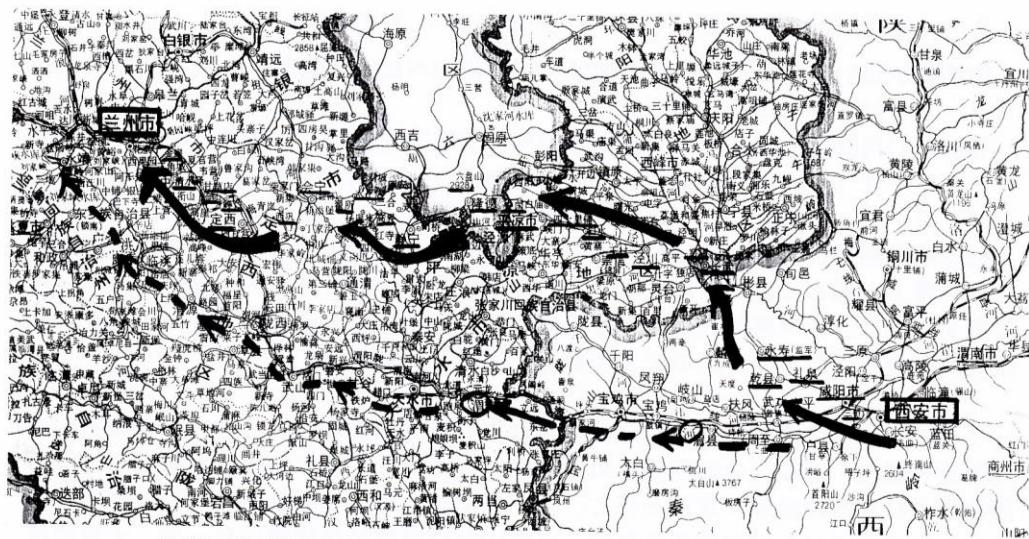


図F：能海寛の通ったルートの再現

寧夏及び甘肅の地図より地名を再現する。

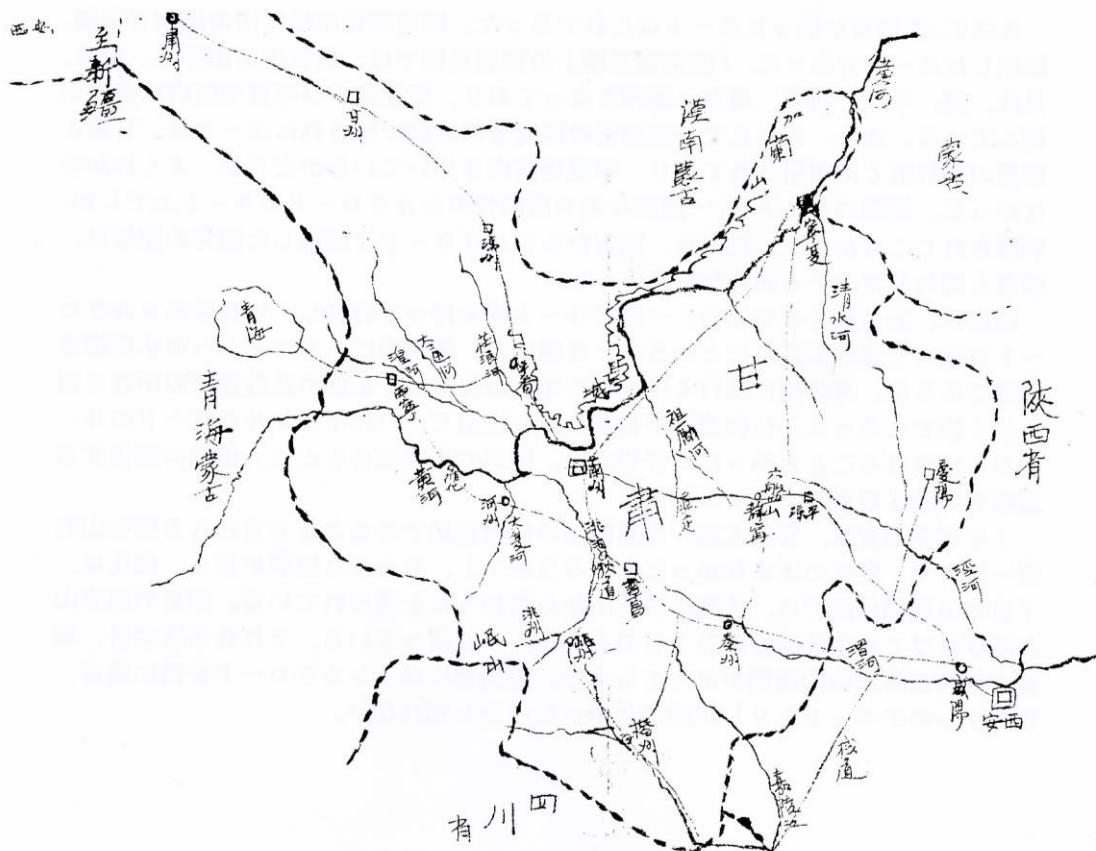
①西安から蘭州までのルート概略

（点線は、従来考えられていた渭水沿いのルート）



②寧夏隆德県地図より、寧夏内のルート

能海寛は自らの「フィールドワーク」をもとに、六盤山をはじめ寧夏地域の手書きの地図を残している。



図G：能海寛の描いた寧夏・六盤山地域の地図

## 2-3 能海のシルクロード行～シルクロードの変遷～

能海寛が歩いたシルクロードの道は、さきに述べた漢や唐時代の南北2つのシルクロードではなかった。

1994年11月30日、松江市で「環日本海松江国際交流会議」が開催された。北東アジアシリーズ'94、「古代北東アジアの文化交流～中国寧夏・韓国慶北・日本を結ぶシルクロード～」がテーマであった。寧夏より来県した。陳育寧氏（寧夏回族自治人民政府副秘書長弁公庁主任）が、「シルクロードの文化交流が中国寧夏地区に与えた影響」と題して講演した。その中で寧夏地区のシルクロードの具体的ルートの変遷を述べた。漢や唐時代および元以後のシルクロードの寧夏内でのルートを、詳細な地名を挙げた上で、次のような重要な報告をしている。

「元の始め、固原で新しい道がひらかれました。つまり、元の長安から涼州への北道路を経て、瓦亭（今の固原県の南）に行ってから、西へ六盤山を越して、今の隆德県及び甘肅の会寧、定西を経て、蘭州に出ました。その新しいルートが出来てから、元の北道はもはや使用されず、六盤山が東西交流の要路になって、大量の軍事車両がその山を通行していました。ですから、元の太祖（ジンギスカン）、憲宗（蒙哥）、世祖（フビライ）の三人の皇帝はみんな六盤山に滞在したり、避暑したりしたことがありました。元、明、清の陝西、甘肅の駅道はみなこの新しいルートを使用していました。」

まさに、能海寛が通ったルートはこれであった。陳育寧氏が松江市の講演で指摘、説明したルートであった。「能海寛遺稿」の旅程地図では、西安府を出発後、醴泉、長武、涇、平涼、会寧、清水、蘭州となっており、寧夏および寧夏地区内は記述が飛んでいる。また、これまでの能海寛の研究書の地図で示されたルートは、甘肅と寧夏の境界近くに線引されており、寧夏地区内を歩いているかどうか、よくわからなかった。能海のルートは、一般的な漢や唐時代のシルクロードのルート上でしか、判断されてこなかった。だから、西安からシルクロードを西進した能海の記録は、寧夏と関わりがないと思われてしまった。

能海は、方々の寺々を訪ね、一定のルート幅を持って行動し、いわゆるシルクロードを通って青海に進んだということを聞いた。最終的に、チベットへの仏典探求の旅であるが、具体的には行く先々の寺を訪ねながら、仏典や仏教遺跡の所在を訪ね歩く旅でもあった。仏教遺跡や仏典の所在次第で、いわゆるシルクロードのルートからは外れることもあったと予想する。現地での情報をもとに、仏教に関係する遺跡や寺院を探求する旅であった。

「なぜ能海寛は、甘肅北部、寧夏南部の仏教聖地であるとまで言われる須弥山石窟一帯まで、足をのばさなかつたのだろうか？」、あらたな疑問が湧く。揚氏は、「日本の民間伝説では、仏教は須弥山から伝わったと語られている。寧夏の須弥山と結び付けて考える必要があるものと思う。」と語っている。それならば余計、寧夏の仏教遺跡須弥山訪問があつてもよい。能海寛には、シルクロードを西に急ぎ、青海からのチベット入りしか頭になかったのかも知れない。

### 3. 島根と寧夏の交流の原点

#### 3-1 能海の旅行記

能海寛の歩いたシルクロードの仏典探求の旅は、どのようなものであったろうか。西安から蘭州までの旅行中の観察を補足しておこう。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

以上計一千四十里、実は十八站里程なれど、少しく病氣せし等の為、二十一日を費やせり、甘肅の里長は四川陝西に比し大なる故、若し四川陝西の比を以て算する時は、十里に対する十五里なり、ゆえに西安、蘭州の間も殆ど一千九百里となる。又甘肅の地の荒敗せる、州縣の城と雖も、二三百戸より七八百戸にして一千を過る所は殆んど是なし従って驛鎮の如きは數十戸の小地たるに過ぎず、之を四川に比せば、甘肅の府又州は四川の一鎮一驛にも及ばざるなり。又平涼府以北蘭州に至る数日間の地の如き、水少なく、たまたまあれば苦水にして更に飲むべからず、天水を執りて溜置き、茶を熬飯を煮る、故に一杯の茶、數文の価あり、一小瓶の水も尚十餘文を要せり、また產物なく、只麦、豆等にて、米を生ぜず、但し水のある涇州、平京、金家崖邊は不相替阿片作昌んにて、通行の頃花盛りなり、可惜好田は只此毒草の耕地と化せること。

蘭州府は黄河に濱し、人口十萬計りと見ゆ、烟草の產地なり、阿片、米、果物、野菜等を産す、此地新彊、蒙古、青海に通ずる咽喉たれば、内地の状況に付見聞する所多し。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

記録は、通過地点里程を書いている。観察は、旅の状況の記述が中心である。

この後、能海寛にどんな運命が待っていたのか、彼にはまだわからない。能海寛は青海で盜賊にやられ一文無しとなり、再び重慶に引き返す羽目になった。そして重慶から3度目のチベット挑戦にいどむ。しかし結局彼は雲南省内で消息を断ってしまった。

#### 3-2 寧夏地域を歩いた日本人

能海寛のシルクロード行の前後、寧夏地域を歩いた内外の探検家がいた。シルクロード地域の探検記録や仏典・仏教芸術を求めての旅であった。

##### (1) 外国人の記録

能海寛のはるか以前より、寧夏や北西アラシャン地方を通過・探検した外国人がいた。寧夏地域に関する記録を、主に深田久弥著「中央アジア探検史」(1971年)より紹介し、彼らの略歴を述べよう。

**マルコポーロ**：ベネチア出身の大旅行家(1254~1324)「東方見聞録」の著者。

かのマルコポーロも、1274年に寧夏地域を歩いていた。

「エルギヌーロ」(涼州)から東へ8日行程を経てエグリガイア地方(寧夏)に到達する。タングート大洲に属する地方で、都市、集落が多く、首府をカラチャン(賀蘭山、すなわち寧夏行省中興府)という。住民は偶像教徒だが、中にはネストル派の教会堂も三基建てられている。ここもハーンに隸属する地域である。カラチャン市ではラクダの毛で駝毛布を織造しているが、その品質のよさは世界に例がない。白い駝毛を使った白駝毛布は特に上等でみごとな品である。」

その後、マルコポーロは、黄河の大屈曲に沿って東行、张家口を通って北京に至った。

**ユックとガバー**：フランス人ラザロ派宣教師

ユック(1813~1860)、ガバー(1808~1853)

1844年~1846年にかけて、内モンゴルからのオルドス、ココノールを経てラサに至っている。オルドス砂漠を横断したユックとガバーの一行は、黄河を渡って石嘴子という小部落に出、それから南に下って寧夏に到着した。「ついに私たちは寧夏の高い城壁と多数の仏塔を望見した。遠くからみるとその仏塔は高い西洋杉のようだった。寧夏の煉瓦の城壁は古い時代のものだが、よく保存されていた。」と探検記録に残っている。

**ブルジヨワルスキ**：ロシア人探検家(1839~1888)

1870年から1873年にかけて、第1回の中央アジア探検(キャフタ～ウルガ～北京～オルドス～定遠營～青海～北部チベット)を行った。

「包頭から黄河大屈曲部のオルドス平原を横切り、磴口で黄河を渡ってアラシャン地方の定遠營(バヤンホト)に到着した。このオアシスの町は、西側は果てしない砂漠、すぐ東側は南北に延びた賀蘭(アラシャン)山脈がまるで岩壁のようにそびえていた。彼はその山脈を探った。この地方の正確な報道は彼が最初であった。」

**スウェン・ヘディン**：スウェーデン人探検家(1865~1952)「さまよえる湖」著者。

第1回中央アジア探検(1893~1897)で寧夏を通過。蘭州より黄河沿いに寧夏、さらにオルドス経由包頭へ到着している。

**ボタニン**：ロシア人探検家、民族学者(1835~1919)

第1次中国・チベット探検で、北京から寧夏、アラシャンを通過する。

**コズロフ**：ロシア人探検家(1863~1935)

1907~1909年にかけて、第2次中央アジア探検でモンゴルからアラシャンを経てココノール、ツァイダムを探検する。別動隊は、定遠營から寧夏府(今の銀川市)および黃河流域を踏査している。

## (2) 寧夏を歩いた日本人の記録

能海寛とほぼ同じ明治の時期に、仏教国チベットを目指した河口慧海、成田安輝、寺本婉雅がいるが、ここでは能海寛以後、寧夏地区を踏破した日本人を簡単に紹介する。彼らは、仏教徒の立場で仏典や仏教遺跡の調査、または特務機関の要請を受けて中国奥地の情勢探査などの目的を持っていた。

### 大谷探検隊

西本願寺門主大谷光瑞師は、明治35年8月より3次にわたり、中央アジアへ探検隊を派遣した。仏教が東漸した地域であり、探検して仏典類を収集することが目的であった。

第一次の大谷探検隊（明治35年～明治37年、1902年～1904年）の渡辺哲信は、「中央アジア探検談」なる記録を書き残している。その中で、シルクロードの六盤山越えのことを記している。

### 西川一三：(1918～ )、著作「秘境西域八年の潜行」

西川一三は、1943年（昭和18年）、内蒙古の中公旗を出発し、青海、チベット、インドへの大旅行を行った。モンゴル人ラマ僧として、1944年（昭和19年）には、アラシャン左旗より寧夏賀蘭山西麓のバロン廟に滞在した。バロン廟での料理材料の豊富なことに驚いている。それらは、寧夏の豊かな大オアシス農業地帯からの産物であった。

### 木村肥佐生：(1922～1989)、著作「チベット潜行十年」

昭和19年（1944年）1月、定遠營（アラシャン）に近づいた日本人青年がいる。日本の特務機関に勤務した木村肥佐生である。ラマ僧に扮してモンゴルの奥深く入った。定遠營よりテンゲリ砂漠を越えて甘粛省へ入り、さらに青海省を経て、拉萨に到着した。木村は定遠營よりココノールまで、コズロフとほぼ同じ道を通っているようだ。

能海寛は、寧夏地域を踏査したはじめての日本人であった。チベットへの入藏、仏典探求を目標に、一途にこれを求めて行動した人であった。苦しい、大きな困難と危険の伴う旅でもあった。旅の記録はいずれも当時の日本に、未知の地であった寧夏をはじめ、蒙古、青海、チベット領地の自然、人、生活の情報をはじめて日本にもたらすものであった。

能海がチベットを目指して中国国内を歩いたのは、探検家と呼ばれる外国人が歩いたのとはほぼ同時期であった。大規模探検隊や命を帶び西域・チベットへ潜行を果たした人たちより、はるか以前の明治30年代であった。

②アラシャン地方：黄河の西方一帯の地で、東は賀蘭山と黄河、南は甘粛、西はエジン・ゴル、北はゴビに囲まれた領域を指す。

オルドス：モンゴル部族の名、またその部族が占拠した地の名称で、現在の黄河の湾曲部と長城に囲まれた全域を指す。中国では古くからこの地を河套（河は黄河のこと、套は地の曲がったところの意）と呼んでいる。

### 3-3 最近の島根と寧夏の交流

能海寛以後95年、島根と寧夏との交流は近年ますます拡大してきている。90年日中國際交流会議～シルクロードと山陰～（主催 環日本海松江国際交流会議：島根県・松江市・島根大学・山陰放送）での学術交流で、寧夏社会科学院の学者を迎えたことを契機に、その後経済・文化面に広がり、各層の県民が島根と寧夏間を往来するようになった。1993年10月6日に寧夏人民政府の主席を迎えて、友好協定の締結に至った。

島根県が94年に作成した「友好提携の記録」より、主な動きを拾ってみよう。

#### \*\*\* 島根県と寧夏回族自治区との交流経緯 \*\*\*

1990年(平成2年) 11月

「日中國際交流会議～シルクロードと山陰～」(主催 環日本海松江国際交流会議)  
寧夏より研究者(6名)、少数民族文化交流団(8名)来県

1991年(平成3年) 9~10月

浜田市友好親善訪問団・島根県フォークダンス連盟・島根県吟詠連盟(45名)  
寧夏国際黄河文化祭(銀川市)に参加

寧夏より友好訪問団(7名)来県:全国育樹祭(大田市)主席

1992年(平成4年) 10月

島根県友好親善訪問団(15名):澄田知事・県議会議長など  
1993年(平成5年) 6月

寧夏より友好訪問団(6名)来県

1993年(平成5年) 10月

島根県と寧夏回族自治区の友好提携調印式(於松江市):寧夏より代表団13名  
しまねエキスポ'93 環日本海交流博 に寧夏回族自治区が参加

1994年(平成6年) 11月

「環日本海松江国際交流会議」開催。

北東アジアシリーズ'94 「古代北東アジアの文化交流~中国寧夏・韓国慶北・  
日本を結ぶシルクロード~」

#### まとめ

能海寛は、日本人として初めてチベット入をめざして行動を起こし、実行に移した人である。第2回目の探検では、青海省からのチベット入りを企て、西安から蘭州までシルクロードの道を歩いた。特に寧夏内を通過したルートは、いわゆる唐時代のシルクロード北路、南路ではなく、元以後のシルクロードであった。固原・隆德県の六盤山はその要所であった。

島根と寧夏の接点を調査してきた。能海寛はその最初に登場する人物である。今と異なり、国際交流を求める目的ではなかったが、あくまでも一筋に、一貫してチベット入りを追及し、中国内で仏典探求の困難な旅を続けた。仏教者として、とりわけチベット仏典の探求者、探検家として高く評価されよう。また、能海寛は、国内では富士山単身登山や中国では峨眉山登山など、チベットのための訓練の性格は持つものの、登山家としての一面も評価されてよい。

能海寛の評価、特に寧夏との接点については、

- 1) 島根・寧夏の交流史で初めて、寧夏南部を仏教者の立場で踏査した。
  - 2) 六盤山・賀蘭山など寧夏地区の地図を書き残し、島根に送った。  
それは島根への寧夏情報の第1号であった。
- などが、特記される。

第2回目の島根県高校生　寧夏国際交流　登山・調査隊の行き先は、これで決定的となった。能海寛が歩いた、西安から六盤山、隆徳県までの寧夏内シルクロード地域を、その100年後、島根の高校生で歩いてもらいたいものだ。六盤山に登山し、能海寛のチベット入藏への情熱に想いを馳せつつ、周辺地域の調査活動を計画したいものである。

(1995年6月10日脱稿)

#### 【参考文献】

- 1) 隅田正三著：「チベット探検の先駆者　求道の師『能海寛』」（1989年12月）
- 2) 内藤正中編：「島根県の環日本海交流～地域からの国際化～」、今井書店（1993年）
- 3) 陳舜臣・NHK取材班：NHKシルクロード「長安から河西回廊へ」（1988年）
- 4) 陳育寧：「シルクロードの文化交流が中国寧夏地区に与えた影響」、環日本海松江国際交流会議報告書（1994年11月30日）
- 5) 現代中国紀行選書：「黄河万里行」、恒文社（1984年）
- 6) 寺本婉峨編：「能海寛遺稿」、大谷大学能海寛追憶会（1917年）
- 7) 深田久弥著：「アジア探検史」、白水社（1971年）
- 8) 前嶋・加藤共編：「シルクロード事典」、芙蓉書房（1993年）
- 9) 環日本海松江国際交流会議：「環日本海シリーズ'90　日中國際交流会議シルクロードと山陰」（1990年11月）
- 10) 島根県総務部文化国際室：「島根県・寧夏回族自治区 友好提携の記録」（1994年3月）

# 能海寛研究会設立発会式

(報告)

平成7年1月22日(日)

金城町波佐・ときわ会館

## 式次第

- 1、開会のことば
- 2、経過報告
- 3、議長選任
  - (1) 規約の審議について(一部修正承認)
  - (2) 役員の選任について(下記のとおり)
  - (3) 事業計画の承認について(規約第4条の事業のとおり承認。詳細は幹事会一任)
  - (4) 学術顧問、顧問の選任について(下記のとおり)
  - (5) その他
- 4、議長解任
- 5、閉会のことば
  - ◎ビデオ視聴『知られざる先駆者=探検家・能海寛』(30分視聴する)
  - ◎意見交換(参加者30名がそれぞれ1分程度感想を述べる)
  - ◎次期事業日程の確認について(役員会の開催、第1回学習会の開催)

### 記

#### 役員の選任(次のとおり決定しました)

会長(横田禎昭)  
副会長(稻見正浩)  
(水崎 齊)  
幹事(坂平弘昭)(隅田哲夫)(横田修身)  
(田中タキヨ)(一町仁市)(内藤大拙)  
(柳楽義道)(岡本文男)  
監事(加納昭則)(小金仍子)  
事務局長(隅田正三)  
事務局次長(岡本正儀)

学術顧問(中村 元 = 日本学士院会員)  
(山口瑞鳳 = 東京大学名誉教授)

顧問(島田雅治 = 県立国際短大学長)  
(山本多喜司 = 早稲田大学教授)  
(佐々木正治 = 広島大学教授)  
(江本嘉伸 = 「西藏漂泊」著者)  
(村上護 = 「風の馬」著者)

## 能海寛顕彰の経過報告

- 明治34年 4月18日 最後の音信を断った日付印を寛の命日としている。
- 明治36年 5月16日 哲学館より講師の称号が寛の生前の業績に対して贈られる。  
(哲学館卒業後10年経過し卓越した業績を残した者へ贈呈される)
- 大正 6年 4月30日 寛の17回忌の法要が淨蓮寺で執り行われる。この法要を記念して能海寛追憶会(私立真宗大谷大学内)では、『能海寛遺稿』が出版される。
- 昭和17年11月 4日 付け本山より西蔵入藏で殉教殉死した寛に対し『大僧都』の追贈が伝達
- 昭和17年12月 5日 寛の40回忌法要を勧修。
- 昭和51年11月28日 波佐文化協会の発起で『郷土の傑人顕彰板(能海寛・島村抱月)』が地区民の浄財で建立される。
- 昭和53年11月 3日 金城町歴史民俗資料館のオープンに伴い能海寛遺品資料の寄託を受け「能海寛資料」として展示。
- 昭和55年 9月24日 NHK松江放送局製作『島根人物伝・能海寛』(15分番組)が放映される。
- 昭和56年11月 3日 波佐文化協会主催で『ラマの都チベット写真展』及び『世界の屋根ラマの都を訪ねて』講師・NHKプロデューサー上野克二による講演会を開催。
- 昭和56年12月 能海寛顕彰会(会長・小森信一氏)が結成され、町内外から多数の協力を得て『能海寛師顕彰碑』建立される。
- 昭和57年 6月 6日 フォトしまね第85号・郷土史夜話「チベット探検家・能海寛」隅田正三著を掲載。
- 昭和58年 2月23日 NHK松江放送局製作『知られざる先駆者=探検家・能海寛』(30分番組)が放映される。
- 昭和60年~63年 波佐文化協会発行の季刊『なわけ』(第7号~第15号)で「求道の師・能海寛」を連載し波佐地区へ全戸配布する。
- 昭和61年 8月31日 能海寛新資料大量に発見(チベット語・梵語・中国語の研究ノート、上京中のハガキ・手紙、中国大陸旅行中のメモを書いた手帳、寛の学んだ図書類、寛の愛用していた机など約800点)。全点数歴史民俗資料館へ寄託展示されている。
- 昭和62年 3月20日 能海寛資料刊行会から『チベット探検の先駆者・能海寛』の絵葉書カラーフォト(8枚1組)が発行される。
- 昭和62年 3月27日 能海寛の足跡を訪ねるドキュメンタリーパンフレット『中国大秘境』がフジテレビ系列で全国放映される。(日中国交回復15周年を記念して中国西南部の四川、雲南、貴州の三省が紹介される。)
- 昭和62年 6月25日 東京大学出版会刊「チベット」上巻山口瑞鳳著を出版。
- 昭和62年 8月22日 波佐文化協会主催リーダー養成講座『波佐寺小屋セミナー』第9回講座で『能海寛と東洋哲学』と題し山口瑞鳳(当時名古屋大学教授)先生より講演を拝聴。この時に能海寛請来チベット文献の解説整理を戴く。
- 昭和63年 3月31日 東京大学出版会刊「チベット」下巻山口瑞鳳著を出版。
- 昭和63年 5月 1日 西中国山地民具を守る会による『能海寛生誕120年特別展』を金城町歴史民俗資料館で開催(8月31日まで)。
- 昭和63年11月 1日 農民画家・池田一憲画「能海寛像」「能海寛師顕彰碑と大佐山」など3点の油絵、「馬に乗った寛師」など2点のカットを金城町歴史民俗資料館へ寄贈。
- 昭和63年11月 1日 西中国山地民具を守る会による「能海寛生誕120年記念第二次特別展」を開催(12月28日まで)
- 平成元年 4月15日 佼正出版刊・西蔵求法伝「風の馬」村上護著を出版。
- 平成元年12月15日 波佐文化協会刊『チベット探検の先駆者・能海寛』隅田正三著を出版。
- 平成 3年 3月30日 島根県広報協会刊・しまねPR読本「コンパス」『人物・能海寛』を掲載。
- 平成 5年 3月 1日 山と渓谷社刊「西蔵漂泊」上巻・江本嘉伸著を出版。
- 平成 5年10月 2日 堺市博物館主催「特別展・河口慧海=仏教の原点を求めた人=において能海寛資料も公開。
- 平成 6年 4月20日 山と渓谷社刊「西蔵漂泊」下巻・江本嘉伸著を出版。
- 平成 7年 1月22日 「能海寛研究会」発会式(金城町波佐・ときわ会館)。
- 平成 7年 3月12日 島根県立国際短期大学及び能海寛に関わる全国の研究者の支援により52名の参加で発足。
- 平成 7年 5月13日 能海寛研究会の第1回学習会(能海寛の足跡①)をスタートする。
- 平成 7年 7月16日 能海寛研究会第2回学習会(能海寛の足跡②)及び能海寛資料・顕彰碑見学。
- 第1回能海寛研究会記念大会(講師・江本嘉伸氏。会員発表・岡崎秀紀氏)を開催。

《能海寛研究会作成》

## 第1回能海寛研究会記念大会を開催

第1回能海寛研究会記念大会（第3回学習会を兼ねる）を下記のとおり開催します。今回は、「西藏漂泊」の著者江本嘉伸氏のご好意により、第1回記念大会の講師として東京よりお越しいただきます。今回の記念大会は講演会と会員発表を中心に行いますが、今後は年次大会を毎年7月に開催し、講演会と会員の研究発表も併せて行っていますので会員の皆様の積極的な研究発表を期待します。

記

日 時 平成7年7月16日(日)  
午後1時～4時  
会 場 島根県那賀郡金城町波佐・ときわ会館(波佐公民館)  
記念日程 午後1時～2時大会・研究発表。2時～4時記念講演。  
講演演題 「能海寛－チベットを目指した最初の日本人」  
～日本・チベット交流史における その役割～  
講 師 江本嘉伸氏＝「西藏漂泊(上・下巻)」の著者  
研究発表 「能海寛の寧夏地区シルクロードの記録」  
発 表 者 能海寛研究会員 岡崎秀紀氏

### 講 師 略 歴

#### 江本嘉伸(えもと よしのぶ)

1940年横浜市生まれ。東京外国语大学ロシア語科卒。読売新聞編集委員。日本山岳会会員。東京外国语大学山岳会会員。「地平線会議」代表。チベット、ネパール双方からのチョモランマ(サガルマタ)、北極、チベット横断、黃河流域、モンゴル遊牧草原などの取材、チングスハーン陵墓探索学術調査などを行った。著書に『ルンタの秘境』(光文社)、『ルポ黄河源流行』(読売新聞社)、『鏡の国のランニング』(窓社)、『西藏漂泊(上・下巻)』(山と渓谷社)などがある。

## 研修旅行の参加者募集について

能海寛の業績を訪ねる研修旅行を下記のとおり行います。会員の皆様へは『石峰通信』NO1でお知らせしておりますように、7月10日をもって第一次受付が終わっています。参加申し込みをいただいたお方へは、詳しい日程表を後日送付します。

記

日 時 平成7年9月8日(金)～9日(土)  
9/8出発Am7:00(波佐)→Am7:40(戸河内IC)→中国自動車道→湖東町→京都IC  
京都市(泊) 9/9～大谷大学図書館～市内見学～(京都IC)～中国自動車道～  
Pm7:00(戸河内IC)～Pm8:00(波佐到着)  
研修先 滋賀県湖東町『西堀榮三郎・探検の殿堂』(能海寛の肖像画と映像サービス)  
京都市・大谷大学図書館(能海寛将来品及び関係資料)  
宿泊先 京都市左京区松ヶ崎修理式町12「かんぽーる京都」  
学習会 9月8日には講師(交渉中)を招き現地学習会(第4回定例学習会を兼ねる)を行います。  
参加料 35,000円(一泊二日の概算)

=第1回定例学習会=

日 時 平成7年3月12日(日)  
午後1時30分~4時

会 場 那賀郡金城町波佐・ときわ会館  
テマ 「能海寛の足跡をたどって①」  
=幼年期~青年期の歩み=  
M元年~M31年(国内編)  
・プレゼンター(隅田事務局長)

=第2回定例学習会①=

日 時 平成7年5月13日(土)  
午後1時~3時

会 場 那賀郡金城町波佐・ときわ会館  
テマ 「能海寛の足跡をたどって②」  
=検査家としての歩み=  
M31年~M34年(海外編)  
・プレゼンター(隅田事務局長)

=第2回定例学習会②=

日 時 平成7年5月13日(土)  
午後3時~4時

会 場 金城町歴史民俗資料館  
淨蓮寺・能海寛顕彰碑  
現地学習会を行う。

=第5回定例学習会= (予告)

日 時 平成7年11月11日(土)  
午後1時30分~4時

会 場 那賀郡金城町波佐・ときわ会館  
テマ 「能海寛の辿ったシルクロード」  
・プレゼンター(横田禎昭会長)

=第6回定例学習会= (予告)

日 時 平成8年1月13日(土)  
午後1時30分~4時

会 場 那賀郡金城町波佐・ときわ会館  
テマ 「未定」  
・プレゼンター(稻見正浩副会長)

=第7回定例学習会= (予告)

日 時 平成8年3月9日(土)  
午後1時30分~4時

会 場 那賀郡金城町波佐・ときわ会館  
テマ 「未定」  
・プレゼンター(仲市實氏)



写真説明上から、発会式の模様、  
発会式参加者、幹事会、学習会、  
顕彰碑にて。

## あとがき

- ◇ ここ数年来、能海寛を中心とした著書の出版活動により、能海寛の業績評価が全国的に再認識されてきました。平成7年1月22日に『能海寛研究会』が全国組織でスタートしました。現在100名の会員の元に研究会としての機能とネットワークの充実にスタッフ一同力を合わせ頑張って参りますので一層のご支援をお願いします。
- ◇ 第1回能海寛研究会記念大会に、機関紙『石峰』創刊号をお届けする運びになりました。学術顧問の中村元先生、山口瑞鳳先生、顧問の山本多喜司先生からそれぞれご寄稿いただき創刊号に華を添えていただきました。次号からは、内容の充実により一層の取り組みをと、考えております。会員の皆様もいろんなテーマで気軽にご寄稿いただきたいと存じます。
- ◇ 能海寛研究のために必要な研究資料についての問い合わせは、事務局（隅田）までご一報ください。
- ◇ この研究会は、能海寛を媒体とした、チベット、シルクロード、中央アジアの研究と国際交流など国際的な幅広い研究テーマで取り組んでおります。特に、今回は島根県と友好提携している「中国寧夏回族自治区と能海寛」の係わりについて会員研究発表いただいた岡崎秀紀氏の論文は時期を得たテーマと言えます。

### 【寄付者ご芳名】

嘉戸ヨシエ様 江津市嘉久志町1697-1  
佐々木正治様 東広島市鏡山2丁目360  
仲市 實様 鳥取市東町3丁目156  
山藤 忠様 浜田市相生町3964  
御厚志ありがとうございました。

### 【編集委員】

横田 穎昭 稲見 正浩 水崎 齊 坂平 弘昭  
田中タキヨ 隅田 正三 岡本 正儀

### 機関紙『石峰』創刊号

発行日 平成7年7月15日  
発行者 **能海寛研究会**  
代表 横田 穎昭  
〒697-02 島根県那賀郡金城町波佐  
波佐文化協会内  
☎ 0855-44-0010(事務局)  
郵便振替口座 01430-9-9118番

## 能海寛研究会(石峰会)規約

### (名称)

第1条 この会は、能海寛研究会(通称「石峰会」)と称する。

### (目的)

第2条 この会は、探検家、東洋哲学者・能海寛の業績を通して、日本とチベットの関わりを学びつつチベットや中央アジアの文化全般についての理解と認識をもち、能海寛研究の全国ネットワークを構築して情報交換並びに資料収集を図り、併せて能海寛の業績を顕彰することを目的とする。

### (事務所)

第3条 この会の事務所は、島根県那賀郡金城町波佐・波佐文化協会内に置く。

### (事業)

第4条 この会の事業は、次のとおり行う。

- (1) 定例学習会の開催。
- (2) 機関紙「石峰」の発行。
- (3) 研修旅行の実施。
- (4) 大会(講演会)の開催。
- (5) 能海寛全資料のマイクロフィルム化。
- (6) その他の目的にそな事業。

### (会員)

第5条 この会の会員は、維持会員及び賛助会員とし、本会の目的に賛同して入会する個人で、入会申込書を提出し、承認を得た方とする。

- (1) 維持会員は、本会の正会員として会の事業施策に参加でき、機関紙「石峰」の無料頒布を受けることができる。
- (2) 賛助会員は、本会の機関紙「石峰」の無料頒布と情報の提供を受けることができる。

### (会議)

第6条 この会の会議は、総会、幹事会とする。

- (1) 総会は、年1回、会長が招集し開催する。議長は会長が当たり、可否同数の場合は、会長の決するところによる。
- (2) 幹事会は必要に応じてその都度会長が招集する。

### (経費)

第7条 この会の経費は、維持会費、賛助会費及び寄付金などでまかなう。

### (会計年度)

第8条 この会の会計年度は、毎年1月1日に始まり12月31日に終わる。

### (役員)

第9条 この会の役員は次のとおりとし、役員の任期は3年とする。但し、再任を妨げないものとする。

会長	1名
副会長	2名
幹事	8名
監事	2名
事務局長	1名
事務局次長	1名

### (役員の任務)

第10条 役員の任務は次のとおりとする。

- (1) 会長は、本会の責任者として会務を統括する。
- (2) 副会長は、会長を補佐し、会長不在時は職務を代行する。
- (3) 幹事は、会務を企画運営する。
- (4) 監事は、会務及び会計を監査し総会において報告する。
- (5) 事務局長は、本会の庶務全般を掌る。
- (6) 事務局次長は、本会の会計を掌る。

### (顧問)

第11条 この会に学術顧問及び顧問を置くことができる。

### (規約の改廃)

第12条 規約の改廃は、総会において、出席者の過半数の同意をもって改廃できる。

附則 この規約は、平成7年1月22日より施行する。

(注)『石峰会』及び機関紙『石峰』の「石峰」は、能海寛師の雅号から引用しております。